

## ガーデンアイランド北海道ミーティング in しかおい (GHI全国大会)

今年、全道で展開されている「ガーデンアイランド北海道2008」の取組みを全国的な視点から考える「ガーデンアイランド北海道ミーティング in しかおい」が、NPO法人ガーデンアイランド北海道、鹿追町などの共催により、7月12日(土)、鹿追町民ホールで開催されました。

静岡文化芸術大学学長川勝平太氏の基調講演「命をつなぐ花の国づくり」では、外国の文化や宗教が日本に伝来された歴史的な背景の中で、日本人の自然観がどのように形成されてきたのかを独自の視点で考察、その中で自然を上手に生活空間に取り込む日本人の持つ生まれた遺伝子の存在に触れ、今後の街づくりや国際貢献の大きな方向性、可能性を示唆。そして、日本全体がガーデンアイランドになる必要があると力説されました。

その後、基調講演者の川勝氏をコメンテーターに加えた、3人のパネラーによるパネルディスカッションが行われ、花と緑による北海道の可能性を議論、多くの示唆に富む提案がなされました。

### パネルディスカッション

「ガーデンアイランド北海道から日本へ、そして世界へ」

パネラー

山本 紀久 氏 RHJS理事・(株)愛植物設計事務所代表取締役会長

### 北海道の魅力はスケール感

北海道と沖縄はともに日本の中でも特異な気候帯を持つところ。片方は亜熱帯、片方は亜寒帯という具合に。その違いは食べ物にも現れている。両方とも観光立県で、食べ物も景色とセットになっていて、みんなそれに感動して帰ってくる。

北海道の魅力はスケールの大きさ。特に農耕風景は素晴らしい。大自然とスケールの大きい半自然の風景が広がっている。それから、防雪林や並木、こういう大きなプロポーションに感動する。また、初夏から夏へのドラマティックな変化に感動する。そうした骨格になっている自然風景に、人間がつくった庭とか草花が一体になっているのが北海道の魅力だ。

### 見えるものすべてを美しく

“美しい庭園の島”といったとき、一般には何かひとつの囲われた、作られたものというイメ

ジを抱くように思う。だから、もう一度“美しい庭園の島”とはどういうイメージなのかを再確認した方がいい。

そこで重要なのが、日本人の自然観とか美意識である。自然崇拝の思想の中で日本人は山と里と町をつくってきた。山は自然を大事にする場所であり、野生の自然のあるところ。里は人と自然とが話し合いながら生産をする場。町は人が支配する場でそこに花を植える、というふうに大きな土地利用があり、昔は山と里と町がうまくつながり自然の循環もできていた。

ガーデンアイランドとは、このように自然と食、住、衣も含めて、素肌美人といわれるように、何もなくてもきれいなこと、そこに咲いている花も風景もすべてきれいである状態をつくることではないか。花の後ろに悪い風景があると、いくら花をきれいに飾っても絵にならない。

イギリスに行って何がいいかというと、どこを切り取ってもきれいなことだ。昔の日本の里山もそうだったが、今は土地利用がめっちゃくちゃで、写真を撮ろうにもビニールハウスや電線があって切り取る範囲が手前になり小さくなっていく。ズームで引いても絵になるようなものをつくらないとガーデンアイランドにはならない。

パネラー

辻本 智子 氏 兵庫県立淡路夢舞台温室「奇跡の星の博物館」プロデューサー

### 淡路から北海道を応援

町づくりとは、住んでいる人たちが花をつくり、自分の町の街路や景観を育てて、それが生き生き見えてくることで町が輝くこと。そのときに、先祖や地域、自然からもらったものを十分に読み取り景観の中に残していくことが重要だ。つまり、そこに住んでいる人の生き様が景観になって現れてくるようにすることではないかと思う。

淡路では、淡路島に地震が起こる前の1992年

ころより“花と緑の公園島”構想を進めていた。2002年には住民参加を主題に、花のまちづくりと植物園の役割というテーマでシンポジウムを開催した。そのとき来てもらった内倉さんに、お互い競争するようにやれば頑張るだろうと思い、「淡路では花と緑の公園島構想がある。北海道でもやったら」と呼びかけた。そうしたつながりもあり、去年のクリスマスには、皆さんからいただいた北海道の松ぼっくりなどでツリーを飾って、“ガーデンアイランド北海道”を神戸から応援した。

### 北海道のガーデンレベルは高い

北海道の魅力は間違いなく自然の豊かさ。持っているものが大阪や神戸、淡路とも違う。また、北海道で自然以上に素晴らしいのは人。開拓者精神というか何かあるときは一つになるという素晴らしさ。もう一つ付け加えると、ガーデンをつくるレベルもカラーコーディネートレベルも上がってきている。それと皆さんが使っているからガーデンセンターが元気だ。

今回8年目に来て思ったことは、北海道がこんなに輝いて、みんながお花が好きで楽しんで暮らしているのは本当に素晴らしいということ。川勝先生がいわれるように、江戸時代から明治にかけて日本に来たイギリス人や世界の人を感じたのもこんな印象ではなかったかと思う。

### 淡路ガーデンルネッサンス

私は勝手に2010年に、日本がここから始まった島として日本の再生、緑の再生をかけたイベント“淡路ガーデンルネッサンス”をやろうと考えている。そのためには、皆さん方の応援がいる。一つで頑張ってもどうもならないのが今の時代。広報されるときには、沖縄も北海道も淡路島も一緒に名前が出てくるといい。日本中がフラワースイランド、ガーデンアイランドということに。

私の考えている“ガーデンルネッサンス”では、住民が自分たちの風景を守り創っていかねばならない。北海道ではそれが実現されていることを今回実感した。

パネラー

高野 文彰 氏 高野ランドスケーププランニング(株)  
代表取締役

### 十勝千年の森—森を庭のようにしつらえる

最近オープンした“十勝千年の森”では、森を庭のようにしつらえたらどうなるだろうかというの



を一つテーマにして、約5年かけて森の環境整備に取り組んできた。北海道の森のほとんどは中に入ると楽しめるような状況ではない。

林床にある笹を刈り、枯れて倒れている木を取り除き、間伐して林床に少し光が入るようにすることを急激にやるとよくないので少しずつやっている。同時に笹刈りの後に落ち葉をかき出す。そうすると今まで落ち葉の下に眠っていた草花が目覚めます。約3年で20種類ぐらいの草花が花を咲かせた。それは外から持ってきたわけではなく、そこにあったものが育ちやすい環境をつくってあげただけ。また、林床を育てていくのと同時に、森にいざなうために木をうまく透かしたりした。例えば、ここはシラカバが少なかったので、シラカバを特色として使おうと考えた。このため、ミズナラを切ってシラカバが中心の白い森、明るい森をつくっていった。

草原と森との風景の接点もかなり大事。うっそうとした笹で見えなかった川に手を入れると、草原の風景と森の風景が馴染んでくる。森の入口も最初は入りたくないような森だったが、大きな木を2本残して門のようにしてあげて、森を透かして自然に入りたくなるようにした。

### 足し算のデザイン、引き算のデザイン

われわれが北海道に来たときに一つ目標があった。それは、北海道の庭、北海道らしい庭をつくりたいということだ。東京で流行っているもの、京都の伝統的な日本庭園などをそのまま持って来たりせず、自然の持つ力を活かした大きな風景をつくっていくこと、その土地の持っている特性を高めていくこと、デザインされた美しさと自然の美しさを融合していくことが大事と考えている。この十勝千年の森で少し答えが見つかってきたかなと思っている。

私たちは、これまでどちらかといえばいろいろ

作りこむデザインもやってきた。これはどちらかといえば足し算のデザインだった。十勝千年の森で取り組んできたことは、逆にいえば引き算のデザイン。いらぬものをとってあげて、そこに潜在的に眠っているものをうまく活かしてあげる。ある意味で環境共生時代の新しいデザインの手法ではないかと思っている。

### 市民参加と行政の果たすべき役割

景観づくりでは、行政の果たすべき役割が非常に大きいと考える。今は予算も厳しくなって、行政ができることも限られてきているが、市民が頑張れば頑張るほど、行政が何となく市民におんぶしていく図式は好ましくないのではないかと。行政として胸を張ってやるべきことをやり、それと市民が切磋琢磨してやることによって活力ある町が生まれるのではないかと思う。

コメンテーター

川勝 平太 氏 静岡文化芸術大学学長

### 日本は地球生態系を直していくモデル

日本には亜熱帯から亜寒帯までであるが、それは地球の生態系のすべてがあるということ。北緯50度以上のところにロンドンやパリなど主要都市が広がっている。北海道はそれより若干南にあるが、近代文明の爪痕が残されているところに対して、亜寒帯の暮らしの新たな魅力づくりのモデルになりうる地域である。日本全体でみれば地球生態系が痛んでいる中で、地球生態系を直していく後のモデルを提供することができる。日本全体がそういう使命感を持つべきだ。

### 女性の活躍に期待

西洋文明の時代は終わった。そのマイナスがはっきりしてきた。そして食料だ、緑だ、花だ、水だ、空気だ、地球の環境だ、となったときに、沖縄と北海道、そして真ん中の淡路島が大きな可能性を持つてくる。

淡路島はいざなぎといざなぎが仲良く結婚して生んだ島。沖縄が県になったのは明治12年、その前は琉球王国だった。その後、沖縄の開発が続いたが、東京から遠いので自然が残った。北海道は、南は九州から北は青森県に至るまで、全国から入植した人がここを作ってきた新しいところ。

その一番古い神話の世界と新しいところ、それが両方あるのがいいと思う。しかも、それは女性がやっているというのが大事。文字どおり男女共

同参画の時代になって、女性が活躍する。その良さを引き出すことが重要で、そうした動きがここ北海道で生まれていた。今後、淡路や北海道が頑張って美を競ってくれるといい。

### 国から出たガーデンアイランズ構想

ガーデンアイランズは、最初は国から出た言葉。今から10年前の1998年、戦後5度目の国土計画改定の際、阪神大震災が起きて、国土計画は何のためにあるかとなった。それで答えは国民を幸せにするためにあるとして、そこから美しい国土づくりが出てきた。日本は島国で、その自然に人の手が入り、心が入っている、それはワイルドネチャーではなくガーデンだと。それが日本をガーデンアイランズにしようじゃないかという発想を生んだ。たかだか10年前の話。それがいま皆さんのような人たちの力で形になってきた。

戦争は生活や環境の破壊をもたらす。ガーデンアイランズはその反対で幸せを、平和をつくること。ガーデンアイランズが形になっていくときに芸術が、感動が、文化が、幸せが生まれてくる。

そう考えると今年のGIHのキックオフというのはとても重要。国がいい始めて、この後の地域の自立と美しい国土づくりを皆様方に任せますといったのが10年前、そしてキックオフを準備するために皆さん方が5年間やってこられて、今日ここにその大会というかミーティングが設けられた。

コーディネーター

内倉真裕美 氏 NPO法人ガーデンアイランド北海道  
プロジェクトマネージャー

### ガーデンアイランドで北海道を元気に

2008年はGIHのキックオフイヤー、始まりの年と考えている。“ガーデンアイランド北海道”運動の根本は、北海道の花と緑のデザインレベルを高めて、魅力ある北海道をつくり、多くの人に北海道に来ていただき、北海道を元気にしていくこと。

今日の話で、住民参加で汗を流すのはもちろん、その労力にデザイン力が入ってくるともっともっと素晴らしいものが生まれると感じた。素晴らしいものが生まれたらもっと大きな達成感となる。

今日、北海道は淡路と沖縄と手を取り合うことで、魅力を何倍にも膨らませることができると感じた。それぞれの地域のいいものを凝縮しお互い紹介できるようにしたい。そんな取り組みに発展できればと思う。